　ロインの部屋を出て、学生寮を後にした一行は、夜の街を歩いて宿へと向かった。
　再び広場を通りかかると、そこには夕方とは比べ物にならないくらいの人出があった。
　ぼんやりと光る灯りの元、みんな酒瓶を持っていたり、食べ物を持っていたり、思い思いの面持ちで前夜祭を楽しんでいる。耳を澄ませば、どこからかアコーディオンの音が聞こえてくる。涼しく吹き抜ける風には、祭りの日独特の、どこかそわそわする雰囲気と、焼けた食べ物の匂いが乗っていた。
「ひえー、みんな楽しんでやがる！」
　広場の様子を見、ノランは興奮して声を上げた。
「なあ！　宿に荷物を置いたら、俺たちも見て回ろうぜ！」
　ネックはそれとなく、人混みの中にアルノルドを探した。……が、助手のジョシュア共に、姿はなかった。
　市場に差し掛かってみると、いつもは昼過ぎに片付けられるはずの屋台や露店がまだ出ている。まさに街を挙げての祭りといったふうだった。
　この『マーデル・プラッタ』は、シェンティア学園なくして発展はなかった。すなわち住人にとって学園の存在はとても大きく、「誇り」とも言える価値を持っている。
　明日はそんな学園が設立されて、記念すべき五年目の日。
　その前夜祭という特別な日を彩るため、いつもはしまり屋な商人たちはほとんど利益の出ない売値で商売をしていた。ともすれば、昼間に冷やかしていた時より三割も四割も引かれた値段で食べ物を売っているくらいだ。
　もちろん、商人に負けじと住人も気合を入れていて、
「ちと階段があるけど、学園まで上ると、広場からこの街の美しい全景を見渡せるよ」
「そこから南を向くと、星空を反射するような海原が見えるんだ」
「さあさ、これもおまけするから食べてくれ。よかったら、祭りが終わってからもまた来ておくれよ」
　と、街の魅力を宣伝するために、観光に訪れた客たちを、心を込めてもてなしているようだった。
　針でつつけば「ぱちん」と弾けてしまいそうな祭りの夜の中、一行は宿へと到着した。
　あてがわれた三階の客室は、かなり広かった。綺麗なベッドが四つに、テーブルがひとつ。トイレはもちろん、その隣には風呂場までついている。料金の割に豪奢であるのは、ネックたちがアリーベから持ってきた土産を提供した賜物だ。
　一行は荷物を降ろして、ひととき休憩することにした。
「ふう、くたびれたぁ」
　ベッドに腰かけて、リアムがうーんと伸びをした。
「なんだか、すごく盛りだくさんな一日だったね」
「朝から動きっぱなしだったもんな」
　ネックが同意した時、それに重なるようにして、
「なあなあ、それより祭り行こうぜ！　祭り！」
　ひとり元気いっぱいなノランが両こぶしを握り、でれんとした顔で、
「すんげえ美人なお姉さんいたんだよ！　しかも二人！」
「もしかして、声かけに行く気じゃねぇだろうな？」
「そんなん行くに決まってんだろ」
「ノランひとりで行って来いよ」
「相手が二人の時はこっちも二人で行くって相場が決まってんだよ！」
　ノランはその場で足踏みし、「早く行こうぜ！」と、強引にネックの肩に腕を回し部屋から出て行った。「ちょっ、待て待て待て待て待て……」というネックの声が遠くなっていく。
「もう」
　リアムは笑って、
「二人とも元気なんだから、ねえ」
　と、ノアに顔を向けた時。
　ノアは大窓を開いて、ちょうどバルコニーに出るところだった。
「……ノア？」
　リアムの呼びかけを背に、ノアはバルコニーの手摺に片手を置いて、眼下の街を見つめた。